

# アビス・ダイアリー

深海好き

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

北上さんが浜辺で拾った怪しい感じのする日記を読むおはなし。

1 / 17 : 念のため必須タグ追加。

# 目次

|     |               |        |        |        |        |        |        |        |        |        |       |
|-----|---------------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|-------|
| 一航戦 | Out of Page 1 | Page 9 | Page 8 | Page 7 | Page 6 | Page 5 | Page 4 | Page 3 | Page 2 | Page 1 | ぶろろーぐ |
| 40  | ある日の          | 36     | 32     | 29     | 26     | 23     | 19     | 15     | 11     | 6      | 1     |

|        |        |        |        |        |        |        |        |      |               |        |        |
|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|------|---------------|--------|--------|
| Page 1 | Page 1 | Page 1 | Page 1 | Page 1 | Page 1 | Page 1 | Page 1 | た鶴   | Out of Page 2 | Page 1 | Page 1 |
| 86     | 78     | 74     | 70     | 65     | 61     | 57     | 52     | 墮ちかけ | 49            | 45     |        |



## ぷろろーぐ

「あー、なんか面白いことないかなー」

そう言いながら、重雷装巡洋艦“北上”は海に面した道路を歩いていった。

「大井っちも今日はお出てるし……って、ん？あんなのいつもあつたつけ……」

今日は、彼女の休日だ。いつもは同じ雷巡の“大井”と共に過ごすことが多いが、今日は偶然予定が合わなかった。

そのような日は大抵、寮でぼーっとしているか、鎮守府の周りをぶらぶらしているかのどちらかが多かったが、今日は後者だった。

そのような偶然が積み重なったのだろうか、彼女は近くの浜辺に、何やら鮮やかな赤色の箱のようなものがあるのを見つけた。

「……なにこれ？玉手箱？私まだ竜宮城とかに行った覚えはないんだけどなー」

近づいて見てみると、それがやはり、赤くて縄のようなもので固く締められた箱だと分かった。大まかに、底面が30cm x 20cmで、高さが10cmほどのなんとも言え

ない大きさの箱だった。

試しに持って振ってみると、カコカコと、中の物が軽く壁にぶつかる音がする。この箱がどうやってここまで来たのかはわからないが、少なくとも中身は水に濡れておらず、無事なようだ。

また、あまり重さを感じず、この大きさの箱では大きすぎるような気もする。

「これ開けてみてもいいかな？ほんとに玉手箱だったら私おばあさんになっちゃうけども」

浦島太郎が玉手箱を開け、年老いたという御伽噺は有名な話だ。

尤も、艦船の化身であると考えられている艦娘が老いるのかは不明だが。

「……開けてみてもいいよね？」

なんとなく誰かに了承を取ってみても、当然ながら周りには誰もいなかった。

「はあ……ようやく紐がはずれた」

縄は見た目以上に固く締まっていたようで、艦娘である自分の力をもつてしてもなか

なかズレもしなかった。

一度、縄を外すのはあきらめて箱のほうを壊そうと、そのあたりの岩に力強くぶつけてみたりもしたが、少しへこむぐらいで空く気配は全くなかった。

そしてその箱と格闘すること小一時間、ほんの少しずつ縄をずらすことによつてようやく箱を開けられる状態にすることに成功した。

もともと箱の縄があつた場所を見てみると、割とはつきりと縄の跡が見える。中が水に浸かつていないとするなら、納得できるといえる。

「それじゃあ…、中身を見てみますかねえ」

開けるときに少し引つかかるところもあつたが、スムーズに開くことができた。

そしてそこにあつたのは…、普通の文房具店に売っているような一冊のノートと、これまた小さめの立方体の箱だけだった。

「ええ…、これだけ？結構疲れたんだけど」

まず、ノートを手を取つてみた。

裏返してみると、そこには大きく「日記」と書いてあつた。

「なんで日記が？何を思つてこの箱に入れたんだろ」

日記だということは分かったので、次は筆者は誰か見てみることにした。

それらしきものを見つけるにはあまり時間はかからず、”日記”と書かれている面の右下に小さく、文字が書いてあった。

そこには、”重巡”……という文字を雑に塗りつぶして、”航巡”と書いてあった。

「なんで艦種で書いてるんだろ。名前で書けばいいと思うけんだけどねー」

とりあえず、名前を隠して書いた日記というのに興味を持ったため、これは後で帰ってからじっくり読んでみることにした。

「さて、それじゃあこっちは何が入ってるかなーっと」

この小さい箱も紐で結ばれていたが、こちらは簡単に解くことができた。

そして、その中には何やら穴の開いた白い球体のようなものが入っていた。

「んん？なんだこれ…痛ッ！」

近くで見てみようかと顔を近づけると、急にそれが上に飛んできて、ちようど額に当たった。結構固かった。

そして、上を見てみると、そこには自分の上で浮いている先ほどの丸く、白い物体が



あつた。

また、それは今までに見たことがある見た目だった。

Page. 1

一瞬何が起きたのかわからなかった。

自分の目がおかしくなければ、目の前にあるのは敵艦載機だ。

とりあえず目をこすってみた。やはりまだある。

もう一度こすってみた。何も変わっていない。

今度は目を閉じて大きく深呼吸してみた。

再び目を開くと、目と鼻の先にいた。

「う、えっ」

変な声が出てしまい、それと同時にしりもちをついてしまった。

また、それが近づいたときに、それに足がついているのが分かった。

少しの間何も反応できずに呆然としていると、それは頭上をぐるぐると旋回し始め、暫く経つと海のほうへ飛んで行ってしまった。

「…なんなのさ、あれ」

とは言ってみたものの、答えは聞かなくても分かっている。

あれは深海棲艦の航空機、そして足があつたのでおそらく水上機だ。

「はあ…。じゃあこれも…」

深海棲艦が書いた日記ということだろう。

普段こちらに向けて凄まじい敵意を向けてくる深海棲艦が日記というようなものを書いているなんて意外も意外だ。

なんでそんなものがこの箱に入っていたのか等と疑問が多々湧くが、好奇心も湧きたてられるのでとりあえず1ページ読んでみることにした。

---

今日は暇だったし北の海に行ってきた。陸の奴らに出会うかもしれないと覚悟はしてたけど行きは大丈夫だった。

ちっちゃいのは今日はいつも通りだった。ここ一か月は陸の奴らが来てないらしい。あいつは陸上型だから仕方ないのか？

んで、機嫌よさげだったからいろいろと遊んでやった。ふわふわ髪の毛も堪能させてもらった。

なんであの子ってあんなに可愛いんだろう。艦装も素直だし、私はあの子になりた  
い。

これで一日が終われば最高だったんだけど、帰りに魚雷が一発直撃しやがった。

そのあと追撃とかはなかったからおそらく流れ弾にたまたま当たっちゃったんだろうけど。不幸中の幸い？

だったけどそれだけで右足が吹き飛んだ。正直言って結構痛かった。

そして、明日はもう何もできないことが確定した。多分治るまで丸一日以上はかかる。  
る。

でも何が一番嫌かって、今これ書くぐらいしかやることがないこと。

艦装が起きてたらそれで何か出来たかもしれないのに。

だけど、直撃したのは私だったんだし、自分の不運を呪うしかない。

それも腹立つ。

今度遭つたら陸の奴らをボコボコにしてやる。

やはり深海棲艦の日記だった：が、なんだか自分が持っていた深海棲艦のイメージとは大きく異なっていた。

まあ、日記を書いている時点でイメージとだいぶ違うのだが。

今までは深海棲艦は恨みだとかの具現化、みたいなものだと思っていたがこの日記からするとそうでもないようだ。

ひよつとしたら、ドッキリとかじゃないかとも疑ってみたが、それならさっきの足つき航空機は何だったんだとなる。さすがに目（？）の位置から炎がうつすら浮かんでいたのでラジコンとかではないだろう。

とにかく、この日記からは深海棲艦の様々な謎について知れる気がする。

なぜ人類に敵対しているのか、どのような生態なのか、上下関係などはどうなってい

るのか……

（なぜ日記が箱に入っていたのか、なぜ日記なのに日付が書いていないのか、なぜ名前を塗りつぶしたのか、というこの日記自体の謎もあるが）

少なくとも、”面白い”ものではある。

とりあえず、これは暇なときに見ようと、北上はその日記を持ち帰った。

……それで、結局さっきの水上機らしきものはどこへ行ったのだろうか。

ああ、本当に潜水艦がウザい。

別に潜水艦がいること自体は別にいい。敵がウザいと思うんならそりゃあ使うよね。

でも、なんでちようどルとかヲとかだけ集めた時に限って来るのかなあ！おかげでまたまた大損傷だよ…

それどころか、戦闘終わってからほかの奴ら見てみたらだーれも被害受けてない。ちよつとぐらい守ってくれてもいいのに…

もしかして、急に呼び出したからみんな実は怒ってたとか？それどころか実は陸の奴らと裏で繋がってたり…?!

そんなことを考えても仕方ないか。とりあえず、今後の課題はやっぱり対潜だな。

対潜といえばやっぱり爆雷投射？あのイとか口がたまにやってるやつ？

でもあれの使い方分かんないのよね。なーんかイとかに雰囲気似てると思って艦装の口突っ込んでみたけど吐き出されただけだし。

今聞いてみたら、どうやら航空機を使っても対潜ができるらしい。それなら爆雷使わなくても対潜できるとか。っていうか、もうレ?とかいうのがやってるらしい。ほかにもやってるやつがいるらしい。

でも本当にできるのか?ヲがやってるの見たことないし。出来たのならこんなことにはならなかったと思うんだけど。

とりあえず、足が治ったら誰かに聞いてみよう。空母か水母あたりがやっぱ聞く相手かな?泊地とかは陸上にいるしな。

今度は対潜もしっかりとして陸の奴らをボコボコにしてやる。

一度鎮守府に帰ってきたものの、まだ大井は帰ってきていなかったのでひとまず自分の部屋でまた日記を読み進めることにした。

やはり、普段見る深海棲艦とは思えないような内容だ。向こうは実は、軍という組織はないからむしろ人間や艦娘よりも自由は生活を送っているのではないだろうか。少



し羨ましい。

それはそれで、なぜ攻撃してくるのかという謎がある。この日記が真実なのだとしたら深海棲艦はかなり思考が人間と似ていると思われるのだが、そのような理性を持っていてなぜ戦争を続けるのだろうか。

それはそれとして、この筆者と思われる深海棲艦の情報がないか探してみた。探すのに結構かかったが、少しだけそうと思われる情報が見つかった。

その情報によると、去年あたりから航空機を使用する“重巡棲姫”が見られるようになったらしい。

とはいっても、この鎮守府からかなり遠いところでしか発見されていないようだが。それといつ交戦したのかという報告は、“重巡棲姫”という名前だけでは分からなかった。

自分が以前であった重巡棲姫は航空機を使っていなかったはずだが。そうだとすると、深海棲艦の姫級も複数個体いるようだ。

ひとまず調べ終わって帰っている途中、艦隊が帰ってきているのが見えた。珍しく半

分ほど中破・大破している。

何があつたか聞いてみると、どうやら戦闘中に突然空母もいなかったのに鎮守府の方  
向へ航空機が飛んできて、その後には重巡棲姫が来たらしい。それで予想外の敵に苦戦し  
たものの何とか撃退できたようだ。

昼に拾つたこの日記とどこかへと行つた航空機、そしてこの重巡棲姫の報告に関連性  
を見いだせずにはいられなかつた。

今日はちよつと遠くまで出かけてみた。もちろん、空母か水母に会うため。

南に行くのは久々だったけど、意外と迷わないものだ。前はいつの間にか西に行つて陸地まで行つてたし。

そしたら、運よく空母と水母が二人ともいた。空母は予想とは別のほうだったけど。

あいつらなんでお互いに仲悪い癖に両方同じ名前を自称してるんだ？嫌だったら名前変えると思うんだけど。

「やっぱり妹がいると」プライドとかが湧き出てくるのか？まあ、奴らの考えることはよくわからん。

それで、二人は陸を攻撃する準備をしていたらしい。私が帰るまで誰も来なかったけど結局来たんだろうか？私は当然断つた。ろくなことにならなさそうだったし。

あの空母、最近動いてなかったしそういう点では応援したい。またボロボロに負けた

りしたらやる気完全になくなりそう。

ただでさえ戦果（自己申告）はもう片方の空母に負けてるのに。（自己申告だけど）

来た目的の対潜ができる航空機について聞いてみたけど、空母のほうは知らんとかぬかしやがった。使えない。

それに比べて水母の有能なことよ。あつちは知ってた。使える。多分二人で戦つたら空母が勝つだろうけど。

どうやら、水母の航空機は普通に対潜できるらしい。なんかわざわざ来た意味が薄れた気がした。

空母は役に立たなかつたから水母から水上機をもらつてきた。どうやって対潜するのか聞いてみたけど勝手にしてくれるらしい。

これなら楽かどうかは知らないけど、だいぶ対潜ができるようになりそうだ。

これで帰るだけならよかつたんだけど、今日も帰るときに潜水艦にやられたから今度はこれを使いこなして潜水艦を叩きのめしてやる。

この日記を拾った日の翌日、任務が早く終わったのでまた日記を読み進めてみた。

日記に出てきた、「空母」や、「水母」とは、おそらく「水母棲姫」と、最近動いていなかったという記述から「空母水鬼」だろうか。「空母棲姫」は頻繁に目撃されているし、自分もわりと高頻度で戦闘を行っている。

攻撃する準備とやらをしていたらしいので、水母棲姫と空母水鬼との戦闘記録を少し探ってみたが、今年的一大決戦でどちらも同時に見られた。この日その日だったかはわからないが。

しかし、最近動いていないとはどういうことだろうか。

深海棲艦は非活動的、もしくは戦闘に消極的な個体がいるということか？しかし戦闘の準備をする時点でそうは思えないが。

そして、日記の表紙の名前が重巡から航巡に変えられていたのも、この日水上機をもらったからだろう。

簡単に装備の贈与をするあたり、深海棲艦同士の仲は良いようだ。

また、人間味のあるところもあるが、簡単に攻撃をするなど言ったりするあたり、人間や艦娘とはやはり違う気がする。

まだまだ謎は多そうであるが、とりあえずこの日記の筆者であろう重巡棲姫は運が悪  
いだけは言えそうだ。

うーん、せっかく貰ったのにうまくいかない。

艀装の口突つ込んでみたら発着艦はしてくれるようになったけど、思った通りに動いてくれない。

行つてほしい方向に行かないし、行つてほしくない方向に行く。

本当にこれで対潜ができるのか？水母はこれでどう対潜してるんだろ……実践じゃないとだめなのか？

ヲとかルどころか、イロあたりも指示ぐらいなら聞いてくれることもあるのに。

あと目を離れたらいつの間にか増えてた。もらつてきたのは1個だけのはずだったけど。こわい。

でもまあ、これでなくなる心配は無くなつたか。さすがに全部一緒になくなることはないでしょ。でもこれほど自由だとありえそうで怖い。

そういえば、ほかのみんなは艦載機持つてるのかな？ヲは当然としても。

ルがこのあいだ「偵察は重要です」だとかなんとか言つてたけど、本当にそうなのか

なあ。目視で十分だと思っただけ。

今度から会ったやつらに聞いてみよう。

まあとにかく、今はこの水上機を使えるようにしよう。

もらったはいいけど使いこなせないどころか、逆に自爆するなんて誰からも笑われちゃう。

あと、今日は陸の本がなぜか流れ着いてた。すつごいぶよぶよだったけど、乾かして見てみたらどうやら陸の奴らの食事の本だった。

あいつら木でも食ってるのかなと思ってたけど、どうやら違うみたいだ。それどころかおいしそうなのが腹立つ。

今度誰かに作らせてみようかな。

---

そういえば、私たちは深海棲艦の食事についてもあまり知らない。



駆逐艦級については、戦争開始直後から人間を捕食していたという記録が残っているが、それだけだ。人型のル級や姫・鬼級が捕食しているということは聞いたことすらない。

私たち艦娘の食事はもちろん普通の食事だ。一応、補給ということとで燃料などを経口摂取することもできるが味はやはり劣るため艤装にそのまま入れることのほうが多い。(一部の空母は除く)

それはいいとして、深海棲艦も陸の食事に興味を持つているのか。確かに、海には穀物はないだろうし植物も少ないだろう。魚介類は数多いだろうが。

それならば、鳳翔さんの料理や間宮さんのお菓子などを見せたりして、深海棲艦を餌付け出来たりするのでは？

ばかばかしいかもしれないが、それで戦争が終わる可能性があるとするばやってみる価値はあるだろう。とりあえずこの日記の筆者には通用しそうだ。

…それにしても、自爆とはやっぱり文字通りの意味だろうか。敵空母も空母娘のどちらも自爆しているところは見たことがないのだが。

あと、これまでのページで毎回損害を被っているようだが、どれだけ運が悪いのだから

うか。(その時だけ日記を書いたという可能性もあるが)  
こちらの不幸艦と会わせてみたらとんでもないことが起きるかもしれない。

飛行機貰ってから数日たったけど、全然操れる気がしなかったから今日は気分転換に、ちよつと陸へ行ってみた。

上陸するときに遠くに奴らが見えたり、街中で何人かのニンゲンに囲まれかけたときは内心ヒヤツとしたけど、まあ大丈夫だった。向こうからしてみたら、敵が内部に侵入してるようなものだろうけどなんでばれなかったんだろ？

それで、本に書いてあつたのを探そうとしたけど、そういえばお金を持っていないのを思い出した。

艀装は置いてきてたし、何よりめんどくさくなりそうだったからあきらめようとしたら、なんか変なヤツが来てあいすくりーむとやらを買ってくれた。おいしかった。

陸の奴らはこういうのをいっつも食ってるのかな？そういう点では羨ましい。今度泊地とか港湾に作れないか聞いてみることにする。でも聞くなら港湾のほうがいいかな？やさしいし。

まあいい気分転換にはなった。帰るときにお土産としてなぜかたこやきとかいうのをもらったけど、どことなくもらった艦載機に似てると思った。まあ丸いという点以外は似てないと思うけど。

それで、その「たこやき」くんは帰ってきたら艦装とたわむれてた。

なんか日に日に私の艦装とだけ仲良くなってる気がする。私とも仲良くなつて、言うことを聞いてくれればいいんだけどなあ。

---

今日読んだ部分はさすがに嘘だと思った。

深海棲艦が陸に、それも本土に上陸しているということは、流石に信じがたい。

それを察知できていないというのは、人類は今、知らない間に王手をかけられていて、かつ、深海棲艦はわざと王を取ろうとしていないということではないのか？

そのことについて考え事をしながら歩いていると、提督の執務室から会話が聞こえてきた。おそらく話し相手は駆逐艦の何人かだろう。

どうしてその話になったのかは当然わからないが、どうやら提督は自分のやさしさに

ついて語っているようだ。

その話によると、

「自分は異動する前、休みの日に、白髪白肌の美人がアイスの店をじっと見ていたからそこに颯爽と現れ一番高いのをおごつてあげた。別れるときに自分のおすすめのたこ焼きを買ってあげた」

「帽子をかぶってその上にフードをかぶっていたけど、一目で美人とわかる雰囲気だった」

とのことらしい。

それが優しい行動かどうかは別として（途中からその人の説明になっていたし）、あの日記の今日読んだ部分と共通点がある。

この日記の筆者であろう重巡棲姫は、ツノが生えているということを除けば白髪で真っ白な肌の美人といえるし、アイスとたこ焼きという部分も共通している。

本当は認めたくないような内容ではあったが、提督の言葉によって真実味が増してしまつたということもあり、また悩み事が増えた気がした。

やつほー☆

帰りに近く通ったからよっちゃった！

重巡って、こんな日記書いてたんだねー。なんかナマイキ！

キミは最近地上に行ってみたのかな？たこ焼きのお味はいかがだったかな??アイス  
クリームは甘かったかな???

そんなキミに、もつと前から地上に行ってる空母お姉さんからのワンポイントアドバ  
イス！

地上のお店には、「大食いチャレンジ」ってのがあるお店があるの！

そこでなら食べ物をいっぱい食べることができて、しかも無料！

それどころかく、場所によつては景品をもらえちゃうことも！これはもう行くしかな  
いね！

あ、お礼? いいよー、そんなの! 気持ちだけでもらつておくよ!

P. S. うちの空母がすいません。ボーキサイトに燃料、おいしかったです。 b y  
中間

クソ！あのクソ大食いコンビめ！資源を勝手に喰らっていくどころか私の日記に勝手に書きやがって！しかも消せないペンで！そのうえクツソ腹立つ口調で！

できることなら破り捨てたいが裏のページにまで被害が及んでしまう！

！  
今度会ったら果たし状を突き付けてやる！このもらった飛行機の性能を見せてやる

上にクソの文が書いてあるせいで現実逃避すら出来ない！クソ！

急に文の雰囲気が変わって目を疑った。

ちよつと読み進めてみると、それは空母、おそらく空母棲姫の文章だったらしい。

これで地上に来ているのが重巡棲姫だけではなく他の深海棲艦もであるということ

がほぼ確定だ。こうなってくるとなぜ自分たちは戦争をしているのかという疑問が膨らんでいく。おそらくしほみはしないだろう。

気分転換にぶらぶらと歩いていると、また執務室から声が聞こえてきた。前回よりも大きい。おそらく金剛等の戦艦が中心となっているのだろう。

「どうやら提督の好きな人を突き止めようとしているらしい。いつも「バーニング、ラアアアアヴ！」とか言っている彼女にふさわしい話題ともいえる。

扉の前で盗み聞きしていると、やはりというべきか、前に話題になっていた白い美人だと言っていた。名前は知らないと言っていたが、それは当然だろう。

そして、中から何人かの艦娘の怒鳴り声が聞こえてきた。自分たちではないことに不満を持っているようだが、言ったら言ったで鎮守府内で内戦が勃発しそうなので外部の人間（人間ではないが）だというのは自然なのだが。

『その提督が好きな人って実は深海棲艦で、今日も戦ってた相手だよー』などと、どう考えても面倒くさい展開になりそうなことをいう気にはさすがになれなかった。



今日は港湾のそこに行つてみた。そこまで北に行つたわけじゃなかったけどちっちゃいのもいた。やっぱりかわいいしふわふわ。

あとなぜか飛行場とクソ空母、クソ中間もいた。飛行場はいいとして、なんで大喰らいクソコンビまでいるんだよ。

しかもあいつらこのあいだのこと問い詰めても謝りすらしない。がいしゆういっしょくとか言つとけば許されるとでも思っているのか？ わざわざ口調変えて落書きしやがって。

それでももうあつたまに來たからガチ戦闘することにした。

そういえば、港湾についていつもケンカの時「やめたほうが」とか言ってるし、陸の奴らに「くるな」とか言ってるらしいけどあいっガチの戦争やっていると思ってるのかな？

それで、こっちは無理やり飛行場を仲間に入れて一戦交えた。結果は私たちの勝ち。うんあれは勝ち。誰が何と言おうと勝ち。絶対に勝ち。

だけれどもあいつらそのまま帰りやがった。クソが。

この後、港湾たちに水母にもらった水上機見せて自慢したけど、水母はこんな持っていないとか言ってた。もしかして私、在庫処分みたいに押し付けられてた？こいつら結局言うこと聞かないし…。

あと、帰ったらなぜか護衛がいた。なんだか最近侵入されまくってる気がする。

とりあえずどうしたのか聞いてみたら、あ、とだけ言うのは聞こえたけどそれだけ言っただけでした。それでそのまま笑いながら帰った。

あいつ何がしたかったんだろう。

---

「北上さーんーん！」

日記をしまつて、ベッドに座ったところで大井おおいづちが飛び込んできた。後ろが壁だったら脳震盪でも起こしていただろう。

「お帰り大井っち。今日どうだった？」

そう尋ねてみたが、どうだったのかはもう知っている。彼女大井つちのいた艦隊は、今日も重巡棲姫と遭遇、追い返したものの大半が中・大破したのだ。入渠時間が北上よりも長かったのもそれが原因だ。

「ねえ、そう思うでしょ、北上さん？」

「あ、ああ。そうだねー」

「ですよねー！」

そういえば、私はまだ出遭ってないなーとか思っていたら、何かしらの同意を求められた。とりあえずそうだねといったが返答は合っていたようだ。こういうのは慣れている。

自分たちは、少しミスをしたら轟沈するという危険性の中で戦っているが、深海棲艦はそういうのではないだろう。それどころか、私たちが必死こいて戦っているのも「遊び」……らしい。(薄々気づいていたが)

大本営や、そうでなくとも長門とかの武人氣質なヤツに見せたらとんでもないことになりそうだなー、と思いながら、この日記と深海棲艦に対して興味が深まったのだった。

今日起きたら目の前になぜか泊地がいた。なんで？

最近会ったというわけでもないし：なんかやらかしたわけでもない：と思う。

いつも思うけどあいつだけなんか不気味。いつも飛べない飛べないとか言ってるし、今日みたいな謎の行動が多いし。

聞いた話によると泊地は謎のノートを持ってらしい。中身は誰も見たことが無いらしいけど…。

やばいことが書いてある気しかない。ていうか絶対書いてある。

それで、今日も飛べない飛べないうるさかったからコイツを飛ばせるやつを探しに行つたけど、一番最初に会つたのは護衛だった。また出合い頭に笑われた。

とりあえず笑いやがった理由を聞いてみたら、どうやら私のツノに奴の艦載機が乗っていたらしい。そういえばあいつの艦載機は私のと違って足に指あるしな。

でもそれだけであれほど笑うのか？笑いのツボがよくわからない。

結局護衛ごときじゃあ泊地飛ばせれなかった。

その次に会ったのは戦艦だった。今日は珍しく戦いに行つてなかったらしい。

おまえの艦装ならこいつ飛ばせるんじゃないのかつて言つたら、何のためらいもなく投げた。

さすがにそれはどうかと思つたけど、泊地は喜んでたつぽい。

それで何回か泊地が投げられてたけどそのすきに逃げ出してきた。

別に良かったよね？

歸りにまた魚雷に当たつたけど…。

べつに天罰とかじゃないと信じたい。

ていうか、私魚雷に当たりすぎじゃない？

---

通路を歩いていっていると、前から少し落ち込んだ様子の一航戦が歩いてきた。時々ため息

をついている。

「あれ、一航戦じゃん。どうしたのさため息なんかして」

「うん？ああ、北上さんですか。いえ、少し衝撃的な出来事がありました」

「ええ。まさか私たちが負けるとは思っていませんでした」

「え？一航戦今日は休みなんじゃないの？いつも通り飯食べに行っただけ  
と思っただけ  
ど」

「ええ、そうですよ」

「じゃあ負けるってなんなのさ」

「実は、そのご飯を食べるとき、いつも通り“大食いチャレンジ”というのを頼んだので  
すが…」

「その時にほかのお客さんが来て、その人たちも“大食いチャレンジ”の“艦娘コース  
”、それも“空母級”を頼んだの」

「そんなチャレンジの詳しいところはよくわからないが、なんだかこの後の展開は分  
かった。

「それで同じタイミングだったから、早食い競争みたいになったのだけれど…」

「食べ終わった時間が4人とも同じでした。相手は艦娘ではなかったのに…」

「ええ？それってホントなの？…ほかの鎮守府の艦娘とかじゃなくて？」

「そうよ。あの二人は二人とも白い髪色だったけれども……。少なくとも私の知っている白い髪の艦娘ではなかったわ」

この発言で相手の二人が確定した気がした。日記に書いてあったように、空母棲姫と中間棲姫の二人だろう。

赤城と加賀が気づかないあたり、やはり変装してきているのだろうか。

「ふーん……。もしかしたら、深海棲艦だったりしてねー」

「まさかね。もし深海棲艦が陸に来て艦娘と仲良く食事するのだったらこの戦争は起きていないわ」

「それでは、私たちは食堂へ行くので……。こんな時にはやけ食いするのが一番ですからね」

そう赤城が言うのと同時に、腹の虫が鳴く音が聞こえた。大量に食ったはずなのにまだこうなるあたり、あの二人も化け物だ。

しかし、これで深海棲艦がもともと提督がいたところだけではなく、このあたりにも来ているということがわかった。

とりあえず、今度の休日は街へ出て深海棲艦みたいな人を探してみよう、と決めた。

今日はまた魚雷を食らってしまった。また潜水艦だった。

それは十分腹立たいことなんだけれど、でもそれ以上にうれしい出来事があった。

なんと、私の艦載機が初めて爆雷を投下してくれた！そのおかげで、最初の一撃以外はくらずに済んだ。

その爆雷投下後には魚雷の航跡とかは全くなくなったから、沈めたか、少なくとも戦闘不能にはしてくれたんだと思う。

でも海底には何もなかったらしいから多分沈められてはいないかな？ちよつと残念。

それにしても、なんで急に私のこと助けてくれるようになったんだろ？今までだったらずつとふよふよ飛んでるだけだったのに。

今日やったほかの事といえば、変な石拾ったから艦載機にあげたらなんか食べてたってことぐらい？

他には何か変わったことはしてないけど。



もしかして、あいつらの好物だったのかな？好物が鉱物…なんてね。

フとかの艦載機とはちよつと違うみたいっていうか見た目からして全然違うし、そういう習性も違うのかな？

わからないことはやっぱり元の持ち主に聞きに行つたほうが早いかな。あいつ普段どこにいろか知らないけど。

とりあえず、これからは私は航巡つて名乗つてもいいのかな？

攻撃受ける前に先制攻撃できるようになつてからじゃないとだめかな。

「あのさあ提督」

「どうした？」

「提督の好きな人つてどんな人なの？」

そう言い終わると同時に、提督は口に含んでいたお茶を噴き出した。

「ゲホツ、ど、どうした急に」

「いや。このタイミングで言つてみたらどうなるかなーつて思つて」

「お前なあ……」

提督が呆れた目をしてこちらを見ているが、まあ気にしないことにする。

「まあ、私も提督が戦艦組とかと話してるの聞いてたけどね」

「……ああ、あの時のか。でもなんで今なんだ？」

「急に思い出しちゃってね」

あのページを読んだから、一日に一回ぐらいは頭をよぎっているが。

何せ、自分たち艦娘の存在意義がどうなのかに関わるようなものだからだ。

まあ、楽しければOKだと思ってもいるが。

「あ、別に提督の事狙ってるとかそういうのじゃないから緊張とかはしなくていいよ」

「……そうストレートに言われると何か来るものがあるが……まあいい。」

あの人のことだな。簡単に言い表すなら……どこか不思議だけれども美しい……かな」

「不思議ねえ。どんなところが？」

「まあ何といえばいいのかわからないが……。とにかく、ほかの人とは雰囲気からして違ったな。どこか冷たい空気を醸し出しているようで、行動はそれとは違った感じで……。」

うーむ、俺の語彙力じゃあこれぐらいが限界だな。実際に会うのが一番早いのだが

な」

「ふーん、あんまり面白くないねー」

「お前から聞いてきたんじゃないか」

この様子だと、やはり相手が深海棲艦だとはこれっぽっちも考えていないようだ。

本人に聞いてみれば何か情報が手に入ると思ったのだが、ダメだろう。

だから、さっさと話を終えて今日の業務を終わらせに行った。

ちなみに、前日に街へ深海棲艦を探しに行ったのだがさすがに発見できなかつた。

# Out of Page—1 ある日の一航戦

「ふああ…。おはようございます、赤城さん。…起きてますか？」

「ええ、起きてますよ。ただ目を閉じているだけです」

こうして一航戦の一日が始まる。

今日は休日なので、それほど急ぐこともない。

そして動きやすい服装に着替える。さすがに出撃時の服ではないにせよ、何かあったときに動きにくいと困る。

その後部屋を出て、一直線に食堂へと向かう。『腹が減っては戦はできぬ』とも言うし、これが二人の日課だ。（今日は関係ない気もするが）

「うわ、加賀じゃん」

「呼び捨てとはいい度胸ね五航戦」

食堂には、先客として瑞鶴と翔鶴がいた。

加賀と瑞鶴は出会うとすぐに煽りあっていつも口論してしまうが、たまにそれが漫才みたいになったり、そもそもどれだけ言っても無駄であるのでもう赤城と翔鶴は口出し

しないことにしている。

こんな口論があつてもなぜか周りの雰囲気が悪くなつたりしないため、実は仲がいいのでは、と噂されていたりもする。

とある駆逐艦によると、『鳳翔さんのお店でもたれあつて寝てるところを見たつぽい！』だとか。

「別にいいじゃん。それよりも、こんなご時世に私服を着てるなんて、これからどこか行くつもり？ いいご身分ね」

「私とあなたは身分は同じだし、何よりも私服を着てるあなたが言えたことではないわ」  
加賀が偶然か故意にか、瑞鶴と同じメニューを頼んでしまったことから会話の応酬がエスカレートしていき、結局食堂を出たのは入ってから一時間経過したところだった。  
割といつも通りのことなので赤城も翔鶴も特に気にしていない。

「ようやく着きましたね。けどもうお昼になっちゃいましたね」

鎮守府を出てからも、なんだかんだ言つて艦娘は国民の人気者だ。集まってくる人を無下に扱うわけにもいかず、何人かの人々に応対していたら既に正午を回っていた。

「おや、また一航戦のお方々ですか。今日もいつものコースを食べに？」

そう言うのは、この食堂、”浜小屋”の店員だ。小屋という割には店の規模は大きい。「ええ。それじゃあ、い「すいません、この”艦娘コース”の”空母級”つての二人分お願ひするわ」…え？」

言葉を遮られ、つい振り返ってしまった。

そこにいたのは、服から髪の毛までいろいろと白い女性と、大半が白いが服とサングラスのみ黒く、その色の対比が様になっている女性だった。

自分達以外でこれを頼む人がいるのかと少し言葉を失ったが、それはその店員も同じようで、こちらも口を開けて固まっていた。

「…どうしたのかしら？」

「いえ…、このコースを選ぶ人を見るのはこちらの方々以外では初めてで」

「？これは無料で頂けるのでしょうか？だったら何もおかしいところはないと思うのだけれど」

「あの、すみませんが…こちらはいわゆる『大食いチャレンジ』ですよ？食べきれないと罰金とがありますし…」

ちなみにこのチャレンジ、たまに内容が変わる。それもあつて赤城と加賀は頻繁にこの店を訪れている。

「だったら食べきればいいだけね」

「…そこまで言うんなら私たちもこれ以上は何も言わないわ」

赤城と加賀は、あの二人はさすがに食べきれないだろうと思っていた。

いつも二人が頼んでいるものは、その名の通り、空母娘をターゲットにした商品で、一般人が食べられる量では到底ない。

しかし、現実とは違った。一航戦の想像を超え、その何倍もの速さで食い尽くしていたのだ。

その速さに驚き、自分たちも負けじと食べる速さを加速させたのだが、それに応じて相手も箸の速さを上げていく。

結局、4人はほぼ同時に、残り時間を半分以上残して食べ終わった。そしてもう用は済んだとばかりに、あの二人はさっさと店から出て行ってしまった。

「…あの二人、本当に一般人ですか？」

「…多分そうね。海外艦が来たという話も聞いていないわ」

「あんな人が居たなんて…。名前ぐらいは聞いておいてもよかったかもしれないね」

食事（と戦闘）に関しては誰にも負けな思っていた。しかし、一般人に同じ速さ

を出されたとなつては、それはほとんど負けといつてもいいようなものだ。  
敗北感を受け、『次こそは勝つ』と心に刻んだのだつた。



艦載機の使い方がようやくわかってきたような気がする。

といっても、変な赤っぽい石をあげるだけなんだけれども。

でもそれだけで、一気に戦いやすくなった。

こいつらが潜水艦発見してくれるおかげで、魚雷に当たる回数がぐんと減った。

どこから来るかわかっていけば、よけるのは簡単だしね。

そして予想外だったのが、こいつら水上の奴らにも攻撃してくれたっていうこと。

こいつらに合わせて砲撃すれば当てやすい。

…ただ、撃墜されてバラバラになった後、破片どうしが徐々にくつついて元に戻るとは思わなかったな。

正直言って、気持ち悪かった。普段は丸っこくて可愛いめなんだけどな。なんとかならないものか。

これで艦載機操れるようになった…とりたいところだけれど、ヲとかは変な石あげてないしなあ。ヲが食ってるのは見たことあるけど。

ていうか一回何してるのとか言われたし。

まだまだ変な石はあるとは言っても、もつと精進せねばならないな。  
でももう航巡つて名乗つてもいいかな。

そういえば、陸に行つてみて知つたけど、あいつらは「艦娘」とかいうらしい。カムス…でいいのか？

そんで私らは「深海棲艦」だとか。

艦なのは私たちのほうだと思うんだがなあ…。ま、シンカイセイカンつてひびきがいいし、そこは許してやるとするか。

「ふいー、これで今日の作戦は終わりー、つと」

放つた魚雷が最後の軽巡級に当たり、これで敵艦隊<sup>勝</sup>殲滅<sup>利</sup>となつた。

どうせ少し経つたら復活するのだろうが、逆にそれを知っているおかげでリラックス

して戦闘できている気がする。

「Niceネー、キタカミー！」

そう北上をほめるのは、高速戦艦の金剛だ。

二人とも、鎮守府の中では割と初期からのメンバーだ。

「いやいや、金剛さんも3隻はやったでしょー」

「Yes。デモ、最後ビシつとかっこよく決めたのはYouネー！」

謙遜しちやっテーと笑う彼女だが、正直言つてこういうテンションにはあまりついていけない。

「…サ、これで今日の任務はFinishネー。艦隊、帰投しまシヨウ」

帰投中変なものをみた。

前にいた漣くづの足元から、泡とは違う何やら白いものがいくつか上がってきたのだ。

それはどう見ても敵の艦戦だった。ぶかぶかと浮かびながら追いかけてこのような何かで遊んでいるように見える。

艦載機のくせに水面を泳ぐんだー、とだけ思った。こちらには何も干渉せずに後ろに消えていったため、あの後何が起きたのかはわからない。

まあ、何も起きなかったから悪いことにはならないだろう。

北上の頭の中は、「早くお風呂入りたいなー」と、「次の休暇いつだったっけ」の二つで埋まっていた。

今日は珍しい……っていうか、初めてのものを見た。ある意味では初めてではないけど。

浮上するとき、何かが頭に当たったからなんだと思ってみてみたら、なんとそれは……死体、みたいな艦娘だった。

あれは酷かったね。全身真っ赤で。どこも欠けてないのが不思議なくらい。いつつも撃ち込んでる私たちが言えたことじゃないかもしれないけど。

まあ、どうすればいいのかわかんなかった。目見開いてうめき声出してたし同情はしたけど。

とりあえず、見た目がなんだか普通のほうの空母の妹に似てる気がしたからそいつのところに連れて行ってみよう……としたんだけどね。

艦娘って潜れないんだな。潜水艦がいるくせに。めっちゃ苦しそうだった。それと

もあれはもう沈んでるのと同じだった？

しょうがなかったから、集積地のとこに持ってた。港湾のほうがいいんだろけど。あいつのほうが優しいし。でも集積地のとこのほうが近かったしね。

まあでもあいつ一人でも人員は多いほうがいいって前に言ってたし。逆に一風変わったやつが入ってきて内心大喜びだったりして。

まあおいてって、そのまま帰ってきたわけだけれど。集積地がどうやってあの艦娘直したりするのは気になるところだったかな。

…もしかして、こういう時が一番の艦載機の使いどころだったり？でももう遅いか。

---

そういうえば、最初に開けた箱に入っていたアレは何だったのだろうと思う。

日記の拾い主である私の監視だとかしたりするわけでもなく、ただ単に飛び立っていっただけだったのだが。

…ひよつとするとだが、この日記の拾い主が誰だったのか知らせに行つたのではない

か？わざわざ日記と同封したあたりその線が濃い気がしてきた。拾ったら殺される類のものであれば、そのまま爆撃すればいいはずだし。

「全機発艦！目標、サンドバツあの提督！やつちやつてえ！」

「俺は関係ないだろおおおおおおお！」

「瑞鶴、あんまり提督には迷惑かけちゃだめよ…」

「いーの！こうでもしなきゃ怒りが収まんないし！」

「よくなあああああいい！！」

そこそこ普通に仲がいいからか、また一航戦と喧嘩でもしたのか気分が悪い五航戦の妹の八つ当たり先になって逃げ回っている哀れな無実な提督の声を聞きながら、「艦載機の使い方ってなんなのかねえ」と思った。

…とりあえず、次提督に会ったらとりあえず労いの言葉を一言ぐらいかけることにしよう。さすがに不憫だと思った。

## Out of Page—2 堕ちかけた鶴

あれからどのぐらい経つたのだろう。

私は今もなお、意識がおぼろげながら大海原をただただ漂っていた。

私はあの時——といつてもどれほど経つたのかわからないが——艦隊の最後尾にいた。そして、順調に任務を終えて帰投する：はずだった。

制海権を取っている海域にたどり着くまでは良かった。：でも、その日の戦闘が激しかったのもあり、そこで油断してしまったのかもしれない。

進んでいる時に聞こえたのが、敵艦発見という声。そして空母が混じっているという続報。

：でも、みんなもう限界だった。燃料と弾薬もほぼ尽きていた。私も、戦闘機以外はほとんどなかった。

このままだと全滅すると思った。そこで、私がここでできるだけ食い止める、と願ひ出した。

当然反対されたけど、それ以外には方法は全く思いつかなかった。



そしてみんなを先に行かせたんだけど…、そのあとのことは覚えていない。すぐにやられちゃったのかな。みんな無事だといいたければ…

「うっ……」

背中に何かがぶつかる感覚ではつとした。でも、陸が周りにあつたりするような雰囲気じゃなかった。

そして聞こえてきたのが、水が盛り上がりつつ落ちて落ちる激しい音。それもすぐそばから。その音の原因はすぐわかった。

なぜなら…、その原因が私の視界に現れたから。

病的なまでに白い顔と体、そして二つの砲身が付いている謎の怪物。

どう見ても…、深海棲艦だと言えない見た目だった。

「かほっ…かほっ」

反射的に声が出そうになった。でも、出てくるのは血とかすれ声だけ。

その相手は顎に手を当てて私を覗き込んでいる。何もしてこないのが不可解で、逆に恐怖が募っていた。

「あんた…、何？」

確実にそう聞こえた。二体の怪物とともに私を見ているから聞き間違いといったわけではないだろう。

話しかけてくるのは予想外で、つい反射的に答えたくなかったが、どちらにしろ声が出ない。

「…あんた答えれないの？まあそうだろうけどさあ」

そういつて顔と怪物の顔？を近づけてくる。他の深海棲艦のように私を沈めようとしてこないのが、恐怖と不安を駆り立てている。こんなことになるなら気絶したままのほうが良かった。

「そっだ」

そう彼女が言うのと同時に、片方の怪物の口が私の上に覆いかぶさる。

ああ、これでとうとう終わりか。

でも、もう一度だけでいいから、翔鶴姉に会いたかったな……

「(っ)ぼッ!？」

もう喰われるんだな、と思った瞬間、口に水が入ってきた。

視界も変わり、体中が冷たい。考えるまでもなく、海の底へと向かっている。

突然のことで呼吸も続かず、衰弱していた私はすぐに気を失った。

何やら声が聞こえて、目を覚ました。甲高い、幼児が笑うような声。

目を開いてみると、そこに見えるのはただ一面の暗い緑。そして、自分が何かの液体の中にいることに気づいた。

上を見ると、ゆらゆらと光が揺れている。水面はすぐそのようだ。

上がろうと思った。そこで、手足が動くのにも気づいた。满身創痕のはずだったのに？

「ぷはっ」

難なく水面に顔を出し、新鮮な空気を吸い込んだ。

そして周りを見てみると、そこにあつたのは大きささまざま、色とりどりのドラム缶の山。

自分がいた場所もその一つのようなだ。

そして先ほど声が出た方向を向いてみると、そこにいたのは…

一匹の駆逐ナ級と3匹のPT小鬼。

一瞬身構えてしまったが、艤装は無くなっていたことに気づいた。

しかし、普段の海で見えるようなおどろおどろしい雰囲気はない。それどころか、小鬼のほうは何らかのカードで遊んでいるように見える。その声を聞きたび、戦闘時のことを思い出して不愉快な気分になる。

私は丸腰で何もできない。ひとまずここで機を伺おうとしていたのだが…、

顔を隠そうとしたとき、ナ級と目があつた気がした。

すぐ目線が切れたから、本当に目があつたかは分からない。いや、でも私がここにいるということはもう深海棲艦も知っているだろうから……

そんなようなことを考えていた。一瞬のようにも数十分のようにも感じられる時間の後、

「なんだ、もう起きたのか」

小鬼とは全然違う声が聞こえた。

これが、思いもしなかった生活の始まりだった。

今日は迷子のおちびちゃんを拾ってきた。ちよつと遠出したただけだったんだけどね。でもどこの子だろう。雰囲気的には、潜水に似てる気がするけどもかわいさのあたりが似てない。

かわいさと髪の毛のふわふわさなら北のちっちゃいのに負けてないね。本音を言うはずつと私の家にてほしいんだけどね。かわいいし。

でも私は優しいからね。当然送りにいくよ。明日だけど。明日だけど。それと、このこめつちやがんばりやさん。私の真似して資材持っていこうとしているのがかわいすぎる。

ドラム缶の横からちらつと見てきたり、ドラム缶の上からびよこつと髪の毛がはみ出てたり。

かわいいところを挙げてたらきりがいな。

でもとにかくかわいい。明日送りに行くついでに集積地のところ行って見せびらかし

たりしてこようかな？

まあ、ヨーロッパ方面なら行ったことあるしのんびりとかわいがりながら行くとするかな。

部屋から出たらずぐ目の前にサングラスをかけた日向へんじんがいた。なぜだ？

「ああ、ようやく起きたか。休日だからといって遅くまで惰眠を貪っているのはあまり感心しないな」

「…え？日向さん、ですよね？どーしたんですか？」

「今私が勝手にやっているアンケートに答えてもらいたくてな」

そういつて渡された紙には、『深海棲艦についての見解』と書いてある。

水上爆撃機・瑞雲を航巡や水母に布教したり、特別な瑞雲を提督にあげようとしていたりといった、普段の行動からはあまり予想できない内容だった。

話を聞いた直後は「ついに軽巡級にも瑞雲教の魔の手が及んだのかあ」と思ったのは内緒だ。

だがこうやって、たまに真剣に吹っ切れた話題を出してきたりすると、悔れない

人物だ。ただ暇人なだけかもしれないが。

質問文としては、「あなたはなぜ深海棲艦と戦っていますか?」「深海棲艦とは、どのようなものだと思いますか?」「今後の対深海棲艦についての見解は?」……といったものだった。

「深海棲艦ねえ……。私は、あんまり戦ってもあんまり意味ないかな、と思ってるかなあ」

「ふむ、それは初めて聞く返答だな。詳しく聞いてもいいかな?」

「いいけど……。まああれ見たほうが早いかな」

そう言っただけで持ってきたのは当然、あの日記。

「それは?」

「深海棲艦が書いてた日記。ほかの人には内緒でね」

日記をぱらぱらと読み進める日向。少しずつ目が細くなっている気がする。

「……これをどこで手に入れた?」

「浜辺歩いてたら拾った」

「ふむ……。じゃあ、なぜこれを誰にも言わなかった?」

「だってそうしたらめんどくさくなりそうだし」

実際今面倒くさいことになりかけてる気がする。見せないほうがよかったか？

「…まあ、これが真実ならこれからの戦闘の気構えが変わってくるな。新情報、感謝する」

一度ため息をついてから、そういつて立ち去っていった。

…このアンケート用紙は回収するものじゃなかったのか？



今日はおちびちゃんをヨーロッパに届けてから帰ってきた。ちよつと名残惜しいけど。

まあいつでも会えるつちやあ会えるからガマンガマン。

でも、ちつちやいのがいつぱいいるのは驚いた。4人ぐらい居たかな？

一人ぐらい連れてきちやあだめかな…いやさすがにそんな誘拐じみたことはしないけどね。

あと日記を持ってくの忘れてた。そのせいで昨日の出来事を日記に書けなかった。思い出したの帰ってきてからだし。

もう昨日のことあんまり覚えてない。ルとか夕を除いて、戦艦が一隻増えてたかな？そんな気がする。

覚えてたらおちびちゃんのこともつと書けただろうになあ。

それと、帰ってきたらなんか艦娘どもがお互いに争ってた。

何やってたんだろ？ 一対一とかじゃなかったし、私たちみたいに喧嘩とかしてたわけじゃなさそうだったけども。

縄張り争いみたいなのだったのかな？ でもそれにしても一人も沈んでいなかったしなあ。謎。

片つぽが空母ばつかで、もう片つぽが戦艦ばつかみたいだったしな。

まあ暇だから戦闘終わったの見てから突っ込んだんだけど…。ひどかった。

航空機も砲撃もできる私最強！ って思いながら行ったんだけども。

まず最初に酷かったのが私の艦載機運用。

あの石あげてなかったせいで全然思い通りに動けなかった。

そして次にひどかったのが主砲。

水抜けきってなくて全然撃てなかった。

あいつらの砲撃もなんか数がある割に少なかったし。絶対呆れられてた。うーん。とりあえずあの石は常備しておこう。

「対空射撃い！」

そんな声が聞こえる。それもそのはず、今は鎮守府同士での演習中だ。

こちらの艦隊には空母は一隻なのに対し、相手の艦隊には空母は二隻。なかなか制空権は取れない。

しかし、こちらには防空巡洋艦の摩耶がいる。ある程度は持ちこたえられるだろう。

「それじゃあ、私もそろそろいきますかねえつと」

対空は他に任せて魚雷を発射した。

結果だけ言うと、命中はしなかったが進路を大きく変えさせたため有効ではあった……と思う。

「おい！ちよつとこれやばいんじゃねえか!？」

摩耶がそう叫ぶのを聞き、一斉にその方を向いた。

まだ始まったばかりでしょ、と誰もが思ったが、そんな考えはすぐ失せた。

堕ちた航空機の中に混じる、一つの白い球体。少なくともまだそんな機体は開発されていない。

それが意味することはただ一つ。それは、深海棲艦の艦載機だということ。それを見た直後、相手側にもその件を伝え、演習を中断し警戒に当たった。結果としては、深海棲艦は一隻として見つからなかった。

しかし、北上は一瞬だけ、遠くで二つの人影が視界に入った気がした。

今日はなんか戦艦に会った。なんか増えた。

そのままの意味。でも増えたっていうか、分裂した。

水からもう一人作るのはまだいい。いや良くはないけど。誰も分裂してるの見たことないし、聞いてもないし。

でも体真つ二つにしてそこから増えるのはどうかと思う。なんか私の体もまだぞわぞわしてるし…。まあ、そうは言っても私の体も一部裂けてるけどね。

あとあいついつつも会うたびに私の体触ろうとしてくるのやめてほしい。

しかも今日はあいつ二人に、あいつの艦装も二つ。うん、一人でもつらいのに二人なんて普通に考えて勝てないよね。

ホント、艦載機くんが居てよかった。そのおかげでツノ一本の方の戦艦が呼べたからね。

あの石を常備するとはいったけど、それを最初に使う対象が戦艦だとは思わなかった

な。

でもなんであいつわざわざ体触りに来るんだ？特に触る意味ないと思うんだけど…。

まあ、とりあえず。あいつが増えるとやばいということが分かったからよつぽどのことがない限り会わないようにしましょう。

---

北上は、休暇の日は、大井おおいっちとよく出かける。

だが、休日が被るのはけっこう少ない。雷巡という艦種自体が3隻しかいないため、しようがないともいえる。

そして、この日も自分ひとりだけ休みの日だった。そんな日も、大体いつも二人で行く店に行く。

いつもはそれも一人で、だったのだが。

「ふむ…。なかなかいい店なんじゃあないか？」

今日は日向と共に外出することになった。

ちやうど鎮守府を出ようとしたところ、出入り口付近にいた日向につかまったのだ。

いつ私に来るかわからないのに、ずっと待っていたのだろうか？だとしたらかなりの暇人だ。

「まあねー。いつも大井つちと一緒に来てる店なんだし」

そして今は、いつも来ている喫茶店にいる。

普段と違う人を入れてるからか、店員に奇妙な目で見られている気がする。

「私は普段こういう店はあまり来ないからな…。何かおすすめはあるのか？」

「うーん、私は大体大井つちと二人で決めてたからなー。強いて言うなら、これかなー」

「そうか。それなら私もそれにするか…ん？」

「どうしたの？」

「いや、向こうの人が気になってな…。」

それを聞いて振り返ってみると、普通の客の他にいる白い長髪の女性。

ちやうど後ろで見えない位置だった。

「ああ…、言いたいことは分かったけど」

「試しに聞いてみるか？」

「えー。私はそんな勇氣ないなあ」

貴女は深海棲艦ですか？という質問なんて、真偽関係なしに応答に困る質問だろう。

した側としても、違ったら気まずいしそうだったらその後で困る。

「そうか。それなら、私が聞いてくる」

「そう言い、席を立った日向。」

その質問をしてくるのだろうか、その行動には素直に敬意を表する。

間もなく、日向が帰ってきた。

…その女性を連れて。

「あれ、聞いてくるんじゃないかったの?」

「ん?呼んできてほしいんじゃないかなかったのか?」

「私的にはどっちでもいいんだけど。私に聞きたいことあるの?」

「そう女性が私に語りかけてきた。」

「てつきり日向が質問してくるものだと思っていたのだが…。」

「また、その女性の瞳は赤色だった。」

「え、あ、はい。えっと、違ったら申し訳ないんですけど…」

「貴女って、もしかして深海棲艦です、か?と小声で言い切った。」

「それでもそうでなくても、どちらの返答でも怖いな、と思いつながら返事を待った。」

「彼女は、一瞬驚いた顔をしたのちに、すぐに顔に笑みを浮かべてこう言った。」



「ええ、勿論」

なんか今日は日が昇る前から駆逐の二人が来やがった。私寝てたのに…

しかも特に用があつたわけじゃなくて、ただ近く通りがかつたから遊べ、つて…。なんか最近勝手に侵入されること多くないか？

陸まで行くのだから、しよーがないからすぐ上で砲雷撃戦することにしたけれども。

当然、砲撃はほとんど効かないよね。口径が違うからね。

まあそんなこと言つてたら、普通に魚雷食らつて負けたんだけどね。2対1だったし、しようがないよね。

あと艦装で普通に殴つてくるのは酷いと思う。私の奴らじゃあんなのできないし、あいつらで殴つたところでふにやつてなるだけか。

あと、あいつら見て思い出したんだけど、カン娘どもの中にたまーにあいつらに似て

るやついるんだよな。そこまで近くで見てるわけじゃないけども。

まあ髪型とか、帽子が印象的だったからそう見えるだけなのかもしれない。

駆逐の二人は知らないとか言ってたし、ただの他人の空似ってやつなのかな？でもあつちも「艦」娘って言ってるんだし、関係性はあるかも？

今度艦娘と戦う時には、とりあえずあいつらか、空母とか空母とかに似てるやつから狙ってみるかな？

ひよつとすると、そういうのを沈めると駆逐になったり…みたいなことが起きるのかもね。

---

「ああ…。やつぱり？」

「あら、すぐ信じちゃうの？ひよつとしたら私がただのアルビノなだけかもしれないのよ」

「まあ、嘘つくメリットはどこにもないだろうからな。それに偽物ならわざわざそんなことも言わないだろう」

喫茶店で見つけた、白い人物は深海棲艦だと、自ら答えた。失礼なことではなくてほっとする気持ちと、本当に深海棲艦に遭ってしまったという緊張を同時に感じる。

「それじゃあ…。まず、お名前をお聞きしてもよろしいでしょうか？」

とりあえず、名前を聞くことにした。この女性の髪形はツインテール。思い当たる節はある。

「へえ、なんで深海棲艦がここにいるんだー、とかじゃないのね」

「深海棲艦が陸に上がっているという情報は知っていたからな。まあ私と北上以外は知らないのだから」

「ふうん？まあいいわ。そうね、私があなたたちが言うところの『南方棲鬼』。そして私が『南方棲戦鬼』。最後に私が『南方棲戦姫』…って発音が同じね。さっきのが鬼で、私が姫。まとめて『南方』でいいわ」

「…はい？」

何を言っているのかよくわからなかった。見た目的に、南方と名のついたどれかだとは思っていたが、そのすべてを同時に答えられるとは思っていなかった。

「今言った通り…って言っても分からないかしら？」

「説明してもらっても構わないか？」

「そう大したことじゃあないけどね。私がただ単に三重人格っただけ」

「さんじゅうじんかく？」

「そう。なんて説明すればいいのかわからないけどね。ま、性格は私たち全員同じだし。装甲ですら艦装以外で見分けつかないって言ってるし、特に気にする必要はないわ」

「そうこう？」

「装甲…というと、装甲空母姫、か？」

「そう、それで合ってるわ…うん、装甲？そういえば…」

そう言うと、服から懐中時計を取り出し時間を見始めた。

「あー、悪いけどそんなに時間はないわね。装甲待たせちゃうから」

「え、結構聞きたいことあるんだけど」

「じゃあ、私たち一人につき1つ。合計3つまで答えてあげるわ」

知りたいことがかなりある私たちには、割と厳しい条件だった。

うーうーうーうーうーうーん……悔しい。

今日、丸い帽子をかぶった駆逐に似たのを見つけたのは良かった。

それで狙い撃ちしてただけ……。当たらないんだよなあ。

いつもは的が6個あるようなものだから、それが1個になったんだから当たらなくなっただけということかな？

その割には向こうはいつも通り当ててくるし。今日だけでもルが5回沈む分ぐらい砲撃食らったんじゃないかな？でもあいつら案外タフだしもつと少ないかな。

まあそれはいいとして……。結局、最後まで砲撃は当たらなかったんだよなあ。

それで、腹に思いつきり直撃食らってまあ分離しちゃったんだけど、艦装君が最後に魚雷放ってくれたみたい。

まあ私は沈んだんだけど、どうやらちようど魚雷が直撃したみたいで、その艦娘が沈んできたんだよなあ。

やった！って思ったんだけど、なんか少し経ったら浮上していきやがった。  
…どういふことなの？あんなの見たことないよ…ちくしょう。

そういうば、こないだ集積地のとこ連れていったやつが空母の妹に似てたんだっけ？  
あいつに今度沈めって言つてこようかな？珍しいからそれはもつたないか。  
まああと何日か粘つてみて、ダメだった時の最終手段でいいか。

「えー…。 たつた3つ？」

「別に私は答えなくてもいいんだけどね」

「まあ。本人から答えてもらえないのならたとえ一つでも有難いだろう」  
たつた3つだけできる質問。

多々ある中からそれだけに絞り込むのはなかなか難しい。

「うーん。日向さんは何かある？」

「いや、私は後でいい」

「そっかー。どうしよっかなー」

そうは言ったものの、一つ絶対に聞いておきたいことがある。

「それじゃあ、私からまず一つ目。『日記を書いている重巡棲姫』について知ってることってない？」

「うん、重巡…あいつか。そういえばずいぶん会ってないわね」

「あーそーなんですか」

「そう。前会ったときはいつだったかしら？あいつ日記書いているの？」

「私はその日記拾ったからね」

「ふーん。今それ持つてるの？」

「いや、さすがに今は持つてないよ」

「あらそう。…あと質問に答えるとするなら、そうね。あいつは整理整頓が若干苦手ね。家の整理はよくちとかタとかに任せてるらしいわ」

「割とどうでもいい情報だなー」

「あいつの日記持つているのなら今の貴女のほうが知ってそうなもの。ま、また今度重巡に会ってまた貴女たちに出会ったら追加で教えてあげるわ」

あの日記の持ち主のことを聞いてみたのだが、結果としては失敗に終わった。確かに、同じ深海棲艦でもあまり会ったりしないという可能性を考慮した方がよかつたかも



しれない。

「二つ目の質問は終わったのか？」

「あー、うん。収穫はほぼ無いに等しいけどね」

「それじゃあ、私からの質問をいいか？」

「ええ、どうぞ？」

日向はいつの間にか持っていた紙を机の上に出し、こう言った。

「この中で正しいのはどれだ？」

紙にはいくつかの事柄が箇条書きで記されている。

日向からの質問は、抜け道に近いものだった。

今日は駆逐どもを連れていった。

奴らがどこにいるかは知らなかったけれども、一時間ぐらいで見つけれたのは良かったな。

そういえば、あいつらは一緒に行動してることが多いけどなんでだろ？共通点は名前ぐらいしかないと思うけれど。

逆に、同じ名前のが二人で行動してるのが珍しいだけか。空母は仲悪いし、戦艦とかは一緒に行動してるってわけではないし。

それで、今度は変な帽子被った方の駆逐に似たのを見つけた。でも正直目の色とか違うし気づけたのもギリギリだったな。駆逐いなかったら多分気づいてなかった。

で、今日分かったのはやっぱり人数って必要だなってこと。

いつものヲとかに加えて、強めのが二人加わるだけで戦闘がめっちゃ楽になった。

相手の戦艦クラスの砲身も何本かへし折ってやったね。

まあ、順調にいったんだけれど。なんか戦闘長引いたみたいで、援軍が来やがった。

最初さっぱり気づかなくてね……。初弾食らったのは私だった。

そのあと砲弾も航空機もいっぱい来てて……。一番最初に沈んじやった。

結局、最後に沈んだのは、似たのがいたほうの駆逐らしい。

そいつが言うには、沈む直前になんか言われたらしい。内容はよくわからなかったて。

最終的に、今日も収穫はあんまりなかったな。

ま、戦闘が楽だったのはうれしかったから今度陸の何か買ってやるか？

でも足がないほうの駆逐はさすがにきついかな。

「へえ、ちよつと見せて？」

南方は日向が出した紙を手に取り、ふふつ、と軽く笑って言った。

「なるほどねえ。その質問方法なら、回数が一回になるってことね」

「まあ、そうだ」

「それありなの？」

「どっちかって言うなら…。アリね。ただ…」

「ただ？」

「今日は時間がそんなにないから。これ一枚分で質問二回分、でいい？」

「北上、いいか？」

「え、別にいいよー」

自分の回数が減ってしまったが、まあいいだろう。

正直、まだ思いついていなかったし、総合的な個数は増えたからまあいいだろう。

「それじゃ、残り二人で上の三つずつ答えるわね。それで、回答はイエスノーでいいの？」

「ああ、それで構わない」

「じゃあ、始めるわね。まず一つ目。『艦娘が沈むと深海棲艦になる』？こんな聞いた  
かったの？」

「時々そういう噂を聞いたのでな」

「ふーん。まあ答えは…、多分『イエス』？」

「たぶん？」

「泊地がそんなこと言ってた気がするわ。でも詳しくは知らないけどね」  
「なるほどな」

「それじゃあ次。『深海棲艦が沈むと艦娘になる』…ただ逆なだけじゃない」

「だが質問としてはさっきのとは別だからな」

「まあいいけど。答えは多分『ノー』。うちのへとかタとかヌとか、私も装甲も何回も沈んでるけどそんなことはないわね」

日記の内容から大体の答えは想像できていたが、裏付けできたのは大きい…と思う。

「じゃあ次、私はラストかな？『深海棲艦は深海で生まれる』ねえ。覚えてないけど『イエス』じゃないのかしら？」

「まあ私もしつかりとは覚えてないしなー」

確か鎮守府で建造されてた気がする。だが、建造中の時の記憶はほとんどない。

「それじゃここからは私ね…って貴女たちからは分からないかしら？『艦娘と深海棲艦

には共通点がある』…あるんじゃないの？艦娘が沈んだら私たちになるらしいんだし」  
「まあ、それもそうだが」

「じゃ、次。『艦娘と深海棲艦の艦載機にも共通点はある』…みんな？」

「どうかしたの？」

「いや、まったく考えたことないことだったから…」

「私もそれは思ったことないな」

「私も水上機を使うし、重巡棲姫も最近水上機を使うようになったりやっぱり関係性がありそうだと思うてな」

「じゃあ多分あるんじゃない？でもそういうの知ってるならそれをわざわざ聞く必要あるの？」

「どちらかというところの紙の質問は確認に近いからな」

「へー。それじゃあ次で最後かな？『深海棲艦はこの戦争を終わらせる気がある』…ああ、貴女たちから見れば戦争なんだっけ」

「そちら側から見ればやはり遊びなのか」

「まあね。みんな飽きたら勝手にやめるだろうから安心してね」

「あんまり安心できないな」

「でも貴女たちあんまり沈まないじゃない」

「沈んでも大丈夫な君らと比べられてもな…」

彼女らが本気の敵意で戦争をふっかけてきているわけではないだけ、まだマシかもしれないが。

「ま、これで6つ全部おしまい。私はもう装甲のところ行くけど最後になんか言いたいことある?」

「あー…、そうだ。私たちもついてっていい?」

「さすがにそれはご遠慮願いたいわね」

「それなら、何か携帯みたいな連絡先などはないか?」

「そういうのは持つてないわ。…あらら、結構時間無いわね。それじゃ、これでお別れね」

「あ、ちよ、ちよつと待つて!あの、できればこれから艦娘を沈めたりしないようにつて頼めるかな…?」

「えー。………じゃあ特別に貴女たち二人だけなら考えてあげるわ。それじゃ!またね」

そういつて、小走りしながら南方は店を出て行った。

南方が出て行ったあと、注文していなかったことを思い出し、注文後、再び話し始めた。

「うーん、本当にいるとはねえ」

「まあ予想の範疇ではあるがな」

「どうする？ 提督とかに今日のこと言っちゃいます？」

「しかしだな…。言ったところで何も起きないだろう。それどころかパニックすら起こるんじゃないか？ 最悪、私たちがスパイだとか思われるかもしれないな」

「それもそーか。なら、今日のことをどうやって活かすかだけども」

「活かすといつても、今日は私たちの知識の裏付けしかできていないぞ」

「あーそつか…じゃあ地道に深海棲艦に会っていくしかないねえ」

「まあ、そうなるな」

「ま、どうせ今日は特にできることもないし。考えるのはまた今度にしない？」

「なら、そうするか」



この後は普段通りに休日をごすことに決めた。  
再び深海棲艦に遭った：ということはなかった。

今日は駆逐どもど地上に行ってきた。しっかりとお金は持って行った。

そういえば、このお金も集積地からのもらい物だけど、あいつどうやってこれ入手してるんだ？

まあそれはいいとして。

足がないほうの駆逐はどうやって陸に持ってくんだけ？って思ったんだけど、なんか陸では足がなかったり動かなかったりするやつ用に、車イスとかいうのがあるんだとか。へー。

なんであいつが知ってるのかは謎だけど。

いや、今思えばあいつら私よりも高頻度で陸に行ってるんじゃないか？

車イスの事を知ってたのはもちろん、それを慣れた手つきで持ってきてたし、それ使つてるとたまにおまけしてもらえたりだとか、そういうことも知ってたし。

そうか、だからあいつ私の知らない店知ってたのか。お礼のつもりで連れてきたんだ

けど、逆に私が感謝する側になってたのか…。

私がこの間食べたアイスクリームの店知ってたりした時点で気づくべきだったかな。

まあ、別に楽しかったからいいかな。

新たな情報手に入れたし、あいつらも多分楽しかっただろうし。

また今度、負けまくったりして気分悪くなったらまた行くことにしよう。

そんなことにならないのが一番いいけど。できれば沈めた記念、つて名目がいいかな。

先日、陸上で深海棲艦と出遭った北上だが、だからといって特に生活が変わったということもない。

正確に言うと、資源が減少してきて次の資源配給まで大型艦や高火力艦の出撃は減少傾向で、弾薬消費が比較的多い北上も出撃日が減っているのだが、多分それは先日の件と関係ない。

ただ、一つ言うとすれば、

「おお、北上。今いいか？」

…こんなふうに、待機中や休日に日向が話しかけてくる頻度が増えた。しかもちょうど大井おおいっちがいけない時だけ。

日向と話しているのを見かけた艦娘が珍しい組み合わせだとか、ついに雷巡にまで瑞雲を…だとか言っているのも聞いたことがある。

多分、誰が出撃して誰が演習して…といったことを把握しているのだろう。少なくとも、北上とその周りだけでも。別にいいが。

「うん、いいよー」

そして何をしているのかというと、今度また陸で深海棲艦に遭った時、どんな質問をするのか、どう言えば進攻をやめてくれるのか…といったことをだらだらと話している。

最初のあたりは、他の娯楽を勧めたらいいのでは、といった戦争をやめてもらうための手段を考えたり、深海棲艦の個人の名前はどうかになっているのか、使用している資源はどうなっているのかといった深海棲艦自体に対する疑問を思い浮かべたりしていた。

しかし回数を重ねるうちに、ああいう格好で恥ずかしくないのかだとか、瑞雲についてどう思っているのかだとかしようもないことも思いついてしまった。

でも、深海棲艦が意外と緩い存在だと再認識したことで、そんなしようもない話をで

きたり、戦いに対する恐怖もだいぶ薄まったりしたことは良いことだと思う。  
まあ、一番いいことは、そもそも戦争なんてしないことなのだが。